

 労協連だより

古村 伸宏

「歴史はいつか真実にいたる」。労協連合会30周年のスローガンであるが、9月5～6両日の30周年記念事業は、「真実のはじまり」を感じる、強い熱気に包まれた。

中高年雇用福祉事業団から始まり、労働者協同組合への挑戦を経て、協同労働の協同組合に到達した歴史。その24年/30年を体験した実感は、「奇跡」としか呼びようがない。

吹けば飛ぶような存在だった。何度も仕事を失い、危機に直面した。しかし、我々を吹き飛ばす風は吹かなかった。風はいつも我々を励まし鍛える風だった。不思議と「もうだめだ」と絶望したことはない。苦しい場面の中にあっても、いつか「何とかかなる」と思えてきたのは何だったのか。何かに守られているようでもあり、守っているような不思議な感覚が蘇ってくる。

5日の記念フォーラムでは、1998年広島協同集会以来になる、内橋克人さんの講演がメイン。静かな中で沸き立つ「怒り」の背景にある真実。これまた歴史が動いてきたことを感じた。法制化時代の協同労働が立ち向かい始めた、多くの社会的課題を共有したパネルディスカッション。その現実を食い入るように感じ、エネルギーに圧倒され、多くの仲間がまた、新しい協同労働の社会的価値を証明する歴史を始めるだろう。

翌日の記念式典・フォーラムに集った人々は延べ2,000名弱。永戸理事長の講演・挨拶はこれまで聞いた、数え切れない話の

中でも秀逸だった。胸に響いた。歴史を感じた。これに応えるように、言葉を発した人々、この空間を共にした人々の熱は、新たな歴史のマグマのように感じた。参加者の数を倍する熱が、確かに動き始めた。

奇跡の30年から真実の歴史の始まりへ。その序章が、協同労働法制化の実現である。8月末の衆院選挙では、ついに政治の歴史が動いた。選挙による政権交代が現実化し、民主党を中心とした政権の誕生である。この結果は、法制化運動にとって好条件をもたらすだろう。しかし、選挙に込められた国民の怒りは、もはや政治を「任す」段階から「動かす」存在へと高まり始めたといえる。間接から直接への高まり。直接参加の時代に協同労働が表舞台に登場する意味を思う。浮かれることなく、法制化実現後の歴史を見据え始めた。

人間が人間として生きる必要条件は、「人間と共にある」ことではないだろうか。言い換えれば、孤独でないことである。その中で必要とされたり、必要とする関係が、人を育て学びに向かわせる。その営みを繰り返す中でこそ、「連帯」「協同」の文化が生まれる。職場の中から文化を生み出し、仕事の中に文化を込め、仕事と人が地域に文化を根づかせる歴史。我々が真実に至らしめようとする歴史とは、こうした誇りある尊厳に満ちた人間の「生きる」歴史である。先人たちの未知なる挑戦の歴史に感謝。